
特攻に死す

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特攻に死す

【Nコード】

N4423J

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

太平洋戦争末期、十死零生の体当たり攻撃で死んでいった幾多の若者たちがいた……。これほど書くのに葛藤した作品はありませんでした。ぜひご一読ください。

(前書き)

この物語は性質上、一部に架空の艦名や人名を使用しています。ご理解のほどをお願いいたします。

今日の陽光は非常に美しい。まことに小春日和のいい日だ。輪島健太は目を細めてつくづく俺の最後の日がかういう日でよかった、と思っていた。朝の目覚めも心地よく、今日が死ぬ日だなんてまったく信じられなかったほどだ。視界にはほとんど雲もない。これが雨の日だったら大変だった、と健太は幾度も航空訓練を思い出しながら思った。一週間ほど前に、灰色の雲が覆う小雨の中を出撃して行った仲間たちがいた。悲壮感をまとい、肩や顔を濡らし、九機出撃して行ったが、最後の突撃の打電が来たのは六機だけだったという。残り三機は見届けの同伴機も雨雲の中に見失い行方がわからなかった。

健太は首を振った。俺はどうせ死ぬなら敵艦に損害を出して死にたい。気分が異様に高揚しているのは最後の別れの儀式の際に飲んだ清酒のせいだろうか。或いは気付け薬のせいか。沖縄への道のりは長く、数時間はかかる。健太はこの際になるべく考え事はしたくなかった。迷い事なら今日まで散々した。もう結構だ。彼は腰につけておいたお守りの人形をそつと見た。基地へ勤務に来てくれていた女学生の一人がくれたものだ。皆の憧れの的であった緒方陽子にもらった時、健太は心底うれしかった。清楚で、それでいて朗らかな彼女を密かに想う同期はさぞ多かったことだろう。

「健太さん、武運長久を祈ってつくつたけん、もらってください」彼は言葉もなく押し頂いたものだ。その彼女も多くの女学生仲間と先ほどの最後の出撃を見送りに来てくれていた。泣き笑いのようなその表情に、健太は親指を立てて応じ、零戦のエンジンをかけて飛び上がった。絶対に笑顔で出発する、の決意を実践できてほつとしたものだった。武士が泣きながら出陣するわけがない。もう、彼女とも二度と会えないのだな。急にそれがすさまじい濃度の実感として感じられ、健太は魂が低く落ちてゆくような気がした。

昭和20年3月、硫黄島が陥落した。鹿児島を知覧基地での飛行訓練のさなか、それを聞いた健太は、いよいよアメ公は本土へやってくる、と確信した。

「台湾はどうするじゃろうか」

同隊に所属する北陸出身のおつとりとした性格の吉村一雄が食事後のわずかな団欒のひと時に、食堂の古い椅子の背の破れを後ろでに触りながら言った。

「無視して一気に沖繩に来るかも知れんろう。獲る必要性の薄い土地じゃけの」

同じく同部隊の年長者である、広島出身のしっかり者の富平義文が爪楊枝を噛みながら答えた。

「とすると、俺らの出撃は近いな」

健太は一人ごちて、窓の外に広がる雲のたなびく大空を眺めた。この頃になると、航空部隊の誰もが自分たちの受けている教練の意味ぐらい知っていた。特攻 生還の可能性の無い十死零生の体当たり攻撃 を敢行するための、死のための訓練。建前は志願制になっていたが、健太ら少年飛行兵らは全員同じ訓練を受けているのだ。古いトンボと呼ばれる練習機に乗って、遙か上空から目標に向かって殆ど垂直に落下し、反転して戻る訓練など、体当たり以外何に使うというのか。

「本土決戦じゃ。神国日本は不滅だからな。いざとなったら元寇の時みたいに神風が吹くんだよ」

と、東京出身で血気盛んな森本富士夫が言った。誰もが彼ほどの純粹さをもう持ちえなくなってしまうていた。ただ、それでも面と向かって森本に異を唱えるものはいなかった。澎湃たる大和魂、精神力で立ち向かえば、鬼畜米英など何も恐れることはない、が彼らの上官の口癖であった。

健太はそんな事を思い出しながら、最後だからと持たせてもらっ

たソーダ水を口に含んだ。甘い。口に広がる満足感。同時に、昨夜の鯛の刺身と味噌汁と白米の美味さも思い出していた。このご時世にそんなものを食べさせてもらえるのは特攻隊ぐらいのものだろう。知覧の基地にいる時は相対的に実家にいるよりも旨いものを食べさせてもらった。四国の田舎育ちの健太にとっては軍隊の食事は豪華なものであったし。アメ玉や栗などもしばしば手に入った。故郷を思い出したのは失敗だった、と健太はうなづいた。暖かく育ててくれた両親の顔、仲の良かった妹の顔が浮かんだ。健太は一筋の涙がこぼれるのを感じたが、ぬぐおうともしなかった。当分は計器を見なくてもただ南進するだけだ。健太に召集指令の赤紙が来て、飛行訓練校に赴く日、父は仕事で送りに来れなかったが、母と妹と、地元の町の人々の心からの出征の祝いに、健太は本当に心から武勇の手柄を立てて故郷に錦を飾るぞ、と誓ったものだった。愛する祖国を侵略しようとするアメリカを絶対に許さん、という気概に燃え滾っていた。今もその気持ちには全く変わりはない。だが、捨て身の特攻をすることになるとは、その時は予想だにしていなかった。

4月になり、いよいよアメリカ軍は沖縄諸島への侵攻を開始した。呼応して、大日本帝国陸海軍も反撃を開始した。同時に、最後の巨大戦艦である大和も沖縄へと出撃し、護衛機も無い中雨あられと米軍の爆撃機に攻撃され、沖縄に辿り着く前に沈没してしまった。陸軍からも「菊水一号作戦」と呼称された特攻作戦が実施され、それなりの戦果をあげつつも、雲霞のごとく押し寄せた米海軍の勢いは怯まず、沖縄戦はまさに死闘の様相を表し始めていた。健太ら少年飛行兵ですらも、十分な訓練を受けたとはとても言えないまま、毎日のように特攻機に乗せられ、自爆攻撃のために遠い沖縄まで飛び立って行った。

ある日、脱走兵が出た。翌日、零戦で特攻する予定だった一人の海軍兵だった。憲兵らの搜索であっさり見つかったが、抵抗が凄かったらしく、健太らが見た時は、三人ほどが顔が変色し、当の本

人も血まみれであった。彼は

「こんな外道な作戦で死ぬるか！ どうせ日本は負けじゃ！」

と知覧の基地内の入り口付近で大声で叫び、途端に憲兵たちに殴り倒され、口に猿ぐつわをかまされていた。義文はそれを聞いて、「アイツのいつとる事は正論じゃ。しかし、どうしようもないわい」とつぶやき、踵を返して奥へと消えて行った。健太は後を追った。「どうしてだ。日本は負けるのか」

相手を確認した後、健太ならという風に頷いて、こう続けた。

「当たり前じゃあ。頼りの連合艦隊はほぼ全滅、B29に空襲に來られても迎撃も出來ず街中焼かれとる。どうやって勝つんじゃ」

「で、でも、神風が吹くかもしれん。神州不滅は嘘じゃないぞ」

「不滅言うたってこれまで攻められたこと自体一回こっきりじゃけんのう。元寇だけじゃ。相手が悪すぎたる、今回は」

健太は黙った。義文は口笛吹いて去って行った。後ろを振り返ると仲間も皆うなだれている。みんな知ってるんだな。健太は自問した。

では、負ける戦争のために死んでゆく俺たちは一体何なのだ？

雲が多くなってきた。無電で現在の位置と状況を基地の通信部に報告した後、健太は再び自分が特攻死する意味を思い出していた。あの日の夜、枕に顔をこすりつけて煩悶した。無駄死にはないか？との疑念が頭から離れない。生きたい、という衝動が耐え難いほど強く沸き起こってきた。なぜ俺たちだけ、同じ年でも生き残れる奴らは大勢いるだろう、なぜ、俺だけ。喉の奥が熱くなってくる。誰にも届かないこの声。布団を被りなおし、懊惱は続く。だが、こういう運命なのだ。俺は『選ばれた』のだ。恨めしい神の導きによって。そうならば、何をかいわんやなのだ。今度は自嘲が起こってきた。

ははは、誰かが「神はその人間に背負えるほどの試練しか与えない」と言ってたっけ。ジッドだかフローベルだか忘れたけれど、上

等じゃないか。この俺は、普通の人には出来ない無茶をやつてのけるんだ。爆弾を抱えて敵艦に体当たりなんて、そうそう誰にでも出来るもんじゃないぜ。しかも、俺のその一撃が、戦艦を沈めるんだ。それは、たとえ負けるにしろ、講和なり敗北後の交渉にもちよつとは役に立つつてもよ。日本人は、ここまでやるんだと。そうだ、俺はその意味で護国の鬼になるんだ。その後の日本のために。健太はそこまで回想して、全ての迷いを吹っ切ることが出来た。意味を、意義を見出せたことは彼にとって救いだった。人間は意味のないことにとても生命を懸けられるものじゃない。健太を乗せた零式艦上戦闘機はエンジンを唸らせ、刻々と沖繩諸島へと近づいていた。

コックピットの中は狭い。健太は立ち上がって伸びをしたくなってきた。だがそれは叶わぬ願いだ。代わりに背筋を伸ばし、首を回した。緯度経度共にすでに目的地に到達している。遙か真下の地上、健太の眼下に無数の米海軍の戦艦、駆逐艦、揚陸艦などがひしめいているのが見える。さて、ここからだ。健太は残っていたソーダ水を飲み干し、舌なめずりをした。旋回を繰り返し、最後の無電の準備をしている頃、視界の端に米軍の戦闘機が見えた。うひよっ、相手にしたらまずい。敵機はどうやら教練で教えられたグラマンF6Fのようだ。健太は一旦うろこ雲の中へ隠れた。上下の判別を失わぬよう計器を見つめ、頃合を見て雲影から出た。幸い、敵機の姿は無いものの、うろろろしているといつまた見つかるとも限らない。ここで打ち落とされでもしたら本当に無駄死になつてしまう。それを恐れた健太は一気に操縦桿を倒した。ぐんぐんと敵艦に近づくと、巨大な駆逐艦をターゲットにすることに決めた。その駆逐艦は、哨戒機によって健太の存在を知ったのか、対特攻機用の旋回運動をはじめ、猛烈な対空砲火を開始した。健太は何度も深呼吸して操縦桿を動かした。

不思議だ。心が落ち着いているのを感じる。敵艦の砲弾までもが

見えるようだ。この感覚は何だ！ と健太は驚いた。彼はその時は明鏡止水の境地に到達していた。エンジン音その他全ての物音が聞こえなくなった。時の流れが遅れ、緩やかになっているのを感じる。両の瞳には逃げているアメリカ軍の駆逐艦がはつきりと見えて、どんと自分が迫っているのがわかる。健太は無電を打った。我レコレヨリ体当たりス、と。次の瞬間、全てが元通りにもどった。刹那、健太は口を開いた。おかあさん、と叫びたかった。だが、その間はなく、健太の乗った零戦は見事駆逐艦の主砲部分に凄まじい速度で突っ込んだ。

米海軍駆逐艦ヒューストンで大爆発が起こった。主砲が吹っ飛び、そのまま燃料に引火し、およそ3時間後に事実上使い物にならなくなり、生き残った兵員達は全員救助され別艦へと収容された。ようやく救助された一人の兵士が怯え、震えながらつぶやいていた。

” We fought with the satan, those
e kind of things can't believe
.....”

まだ地平線の上には燦然と太陽が輝き、白く光る雲は風を受けて大きく動き流れていた。(終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423j/>

特攻に死す

2010年10月8日14時55分発行